

Making

つくる



解体

かつて人命を預かってきたセイルたちは専用の糸でとことん強靱に縫製され、引退してもなおタフである。

これを解体するところから、BLUE-Zのバッグ製作は始まる。数メートルから十数メートルもあるセイルの複雑で頑健な縫い目をほどこく作業は、多大な労力と時間を要し大の男でも相当に消耗するが、Matsuokaにとっては最も大切なプロセスのひとつだ。

インスピレーション

海のセイルには潮の香が、空のセイルには離着陸地点の土と草の香が残る。経年変化の表情を感じ、ひとつひとつちがうヒストリーに畏敬の念をあらたにし、匂いや手ざわりにインスパイアされる時間があるからこそ、プロダクトにもリアリティが引き継がれる。

Making | つくる

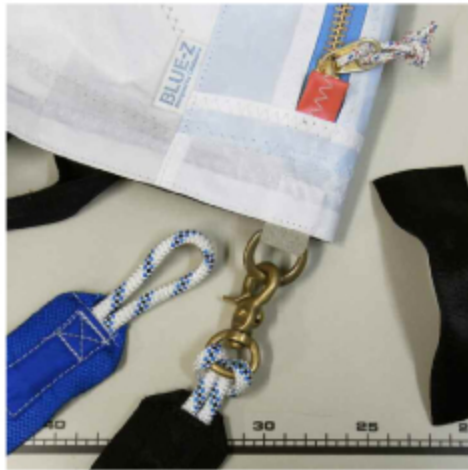


デザイン

バッグをデザインすると言っても、先に絵があってそこに生地を合わせていくわけではない。まずセイルを見て、バッグに仕上がったときに経年変化の表情が最も活きるパターン取りと配色を考える。バッグという新しい役割を持ってなお、セイルであり続けられるよう立体のイメージを組み立てていく。

セイルクロスの色合いは限られているし、手に入る量にも偏り・ばらつきがある。二度とやっこない素材で無為にロスを出せない。自由度は決して高くない中で、1点のバッグに最低でも4面あるパターンをひとつひとつデザインする。

Making | つくる



フレキシブルの理由

一般的な布地とちがって、セイルクロスは伸縮しない。簡単に伸びるようでは風圧を受け止められないからだ。

伸びないもので自然な曲線を縫うためには、解体したセイルからさらに何層もの補強材を外し張りを調整するなどの作業が生じる。技術・経験は言うに及ばず、皮膚感覚でセイルクロスの特性を知っていることが不可欠である。

新品のときには均一のコンディションだったセイルクロスも、部位や使用年数によって柔らかさや色味や質感が異なってくるので、必要に応じた補強や洗浄を施し、縫い方を調整する。

同じモデルのバッグでも使うクロスの質感や配色や張り具合に応じて縫い糸を変え、ロープを変え、付属パーツやハンドルの仕様を変える。

手間は増えても、仕上がりに妥協できない以上つくり方をフレキシブルにするしかない。

Making | つくる

敢えて非効率

つまるところ、BLUE-Zのバッグはモデルごとに型紙はあるものの、数をまとめて即物的にこなせる工程が実際ほとんどない。これが、30年以上に渡ってさまざまなアパレル製品に携わり、外注や海外工場での大量生産も経験してきた Matsuoka が選んだ“つくる”スタイルのベストである。

何度経験しても、セイルにはさみを入れるときは、いつも緊張とプレッシャーが伴う。素材にふさわしいだけのものに仕上げようとすれば、デザイン、裁断、縫製、すべての工程に手間もかかって当たり前。効率も大事だが、そのためにつくり方を曲げない。クオリティを維持できなくなるほどの数につくらない。

自分の方法を守る

いかに手間とコストを省くかに腐心する現代的生産のスタンダードから言えば、まちがいなく「割に合わない」方向を選んでいる。けれど、結局はつくられ方なりのものしかできあがらないことも、実体験として知っている。だからやはり、自分で納得のいくまでていねいな仕事を続ける。